

---

# いきるって大変（冥府招魂課臨時職員物語）

青蛙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こきるつて大変（冥府招魂課臨時職員物語）

### 【ZPDF】

Z0119D

### 【作者名】

青蛙

### 【あらすじ】

目指していた高校の受験に失敗し、ヒリート一家の中で居場所を失くした少女。自殺を図った彼女の前に現れたのは死神。しかし彼は一枚の紙を差し出しだした。そこから始まる生還のためのお仕事の日々。

## 1・蒼い目の鴉

高層のマンションの十五階の南側の端の区画にあるベランダの手すりに、一羽の鴉が止まつた。その鴉は中を窺うように首を上下させる。その鴉が他の鴉と徹底的に違つのは曰が深い海のように蒼いからだ。

しかし、違つのはそれだけじゃない……。

「どうとづ、やつちやつた」

なぜか俯瞰ふかんした構図で葵は、自分が死に行く様を他人のように眺めていた。

浴槽の脇に崩れるように倒れているスウェット姿。左手はその浴槽の縁まで溜められている水の中にあつた。そこから流れる朱赤の液体が水に溶けるのを拒むように漫けられた手の周りを縁取つて広がる。まるでその主のように 周りから拒絶されている、葵がそう感じ始めたのはいつの頃からだろうか。

兄と同じ中学の受験に失敗して地元の公立中学に通つみになつた時か……それともレベルが落ちる別の中学の合格通知を親の前でちぎつて捨てたあの日からだつたか。いや、もっと前からかもしない。

あれから三年、自分なりに見返してやるつと頑張つたはずだつた。いや、頑張つたのだ。

しかし、頑張れば夢は叶うなんて現実はそう甘くない。

中学三年生の十一月にもなると高校をどこにするのか、そろそろ本格的に決めようという頃だ。そして、何回田かの二者懇談の日。

「澤田、そこそこできるんだから公立を一つは受けないか。私立専願と言つたつてここはレベルが高すぎるよ。先生は勧められない」

担任が何枚もの書類を交互に見ながら口にした言葉に葵は苛立つ。

先生、そこに入れないわたしなんてどこにも居場所なんてないんだよ。葵は胸の内で先生に訴えるが、口は堅く引き結ばれていた。

「やはり、ここは無理ですか、そうですよね。わたしも主人も塾の先生もそういうふんですけどこの子聞かなくて」

お母さん、そんな大きな溜息をつかないでよ、と葵はちらりと母親を見る。

「自分も主人も勉強だけは出来たんですよ、運動のほうはまあ見られたもんじゃないんですけど。この子の兄もねえ、わりとするつと希望の学校へ入れたものですから……。小さい頃からあまり勉強、勉強と言わなすぎたんでしょうかねえ、先生？」

「いやお母さん、決して成績が悪いわけじゃないんですよ。希望の学校のレベルが高過ぎるだけで」

延々としゃべる母親の横で葵は懸命に吐き気をこらえていた。この会話、この場所、すべてに吐き気を覚える。

そして 奇跡は起こらない。やはり合格通知は来なかつた。それからの長い長い春休み。泣いて頼まれて受けた公立の一次募集の試験を受けたが……葵はそれきり部屋から出なくなつた。

そして初夏の爽やかな風が吹く季節になる じめじめする六月は嫌だな、じめじめするのは自分だけでいい。 それくらいの気持ちで日にちを決めた。 それが今日だつた。弁護士である母親の帰宅は、今日も遅いだろう。弁護士事務所を、共同経営している父親もたぶん同じ。 その間にすべて終わつているはずだ。

「死ぬのって結構時間がかかるんだ」

葵がそう、呟いたすぐ後に玄関を開ける音が聞こえた。

「あの書類どこに置いたかしら。出かける前だからリビングだわね、きっと」

「ぱたぱたとスリッパの音が近くなり、ぱたりと止まる。

「葵、シャワーでも浴びていいの？ 朝ご飯食べた？」

「母親の傷口に触れないように。そこにそつと消毒をしようとするみたいな、気遣うような声が聞こえる。しかし、どこに傷があるのかなんてこの人は知らない。

「葵、戸が開け放しよ、水が外に漏れるから母さん閉めていい？」

浴室の折り戸を閉めようと扉に手をかけた母親の動きが止まり、掠れたような声が上がった。

「あ、葵、あおい、あおい、しつかりしなさい。た、大変だわ、お父さんに電話しなきやあ。そうだ、圭にも連絡しなきやあ」

「何で救急車じゃないんだよ、この人は。葵は軽く溜息をついて慌てふためく母親を眺める。こんなに容易くパニックに陥る人だつたつけ？」

「母さん、葵がどうしたって？」

しばらくして現れたのは大学生の兄だつた。そして浴室を指差す母親を一瞥して中に入る。

「葵、大変だ。何やつてるの母さん、救急車呼んで、早くつ。なんで葵をそのままにしつくんだよ、手からの出血を止めなきやあ」

葵の体を抱いた圭が動転して浴室の前に立つている母親を突き飛ばすようにしてリビングに運ぶ。辺りを見回して手近に適当な物がないと見るや、葵の履いていたスウェットのズボンから紐を引き抜いて傷口から心臓に近いほうを縛つた。

「母さん、電話した？」

「ああ……今、したわ」

「どれぐらい経ってしまったんだりつ。おい、葵田を開ける」

「あたしのせいなんだわ、葵がこんな事になつたのは。そうでしょ、ねえ、圭」

縋りつく母親を引き剥がして圭がきびしい声を出す。

「今はそんな事どうだつていいよ、毛布持つてきてよ。体が濡れて冷たいんだ、わかる？ 母さん、今は自分の気持ちなんて置いておけよ。葵が死ぬかもしれないんだぞ、あんたの気持ちなんて知らねえよ」

こんな頼りになる奴だつたんだ、圭。いつもすましててわたしの事見下してたか、それとも眼中に無いのかと思っていた出来の良い兄の姿。ちくりと痛むのはわたしの体じゃなく心の方か。葵はそつと胸をおさえた。

## 2・生きたい

七分後、サイレンの音がマンションの下に響いて葵の体は市民病院へと運ばれた。処置室に入るまでに一騒動。母親がストレッチャーにしがみ付いて離れなかつたのだ。ようやく看護士やら救急救命士やらが引き離したのだが中年の中年の中年の中年がてこづるのかと思うほど母親は暴れた。

葵は他人を見るように自分の母親を見た。何事も合理的に考えて行動する人だつた。人前で娘の救命が自分のせいに遅れるような馬鹿なまねをするなんて。いつもの母親からは信じられないことだつた。

「何をしているんだ、由美子。いい加減にしないか」  
息を切らせてやつて来た父親が大声を出す。

「葵が……どうしたらしいの？」

「圭、一体なにがあつた？　お母さんからの電話では何もわからな

い」  
「葵が、どうやら自殺を図つたらしい。風呂場で手首を切つて倒れていた」

「自殺？」

息子の言葉に、急にがつくりと父親は椅子に座りこんだ。両手で自分の頭を支えていないと落ちてしまつとでもいうように、しつかりと垂れた頭を抱える。

「あいつの気持ちをなぜ聞いてやるのとしなかつたんだ」  
しばらぐの沈黙のあと、ぽつりと囁つその顔は母親の方を向いていた。

「そうよ、全部わたしのせいよ。それでいいわよ」

「そんな事を言つてはいるんじゃない、葵が何を思つてはいたのか聞いたことがあるのかを……」

「それじゃあ親父は聞いたことあんのかよ、葵の気持ち」

圭の一言に両親の言い争いのよつた会話が止まる。

「葵だけじゃ、ない。俺の気持ちだって一度も聞かれたことなんてない」

「圭、何を言つて……」

「おれは確かにあんたらの思惑どおりに動いていたけど、だからつていつも幸せいっぽいだつたわけじゃない。そりやあ表立つてあんたらは勉強しろともなんとも言わなかつたけど。物心つくころには聞かされる話は自分たちがいかに勉強して親の助けなしに大学を卒業し、貧乏に耐えながら司法試験に受かり、事務所を経営してきたか、そんな話ばかりだ。金のかかる私立の学校に行かせてもらえるおまえは幸せだと、いつも言われているようで苦しかつた。頑張つていい成績を取つても当然のよつにみられる。息が詰まりそつだつたんだよ、だから家を出たんだ」

圭が、出来のいい兄貴がこんなことを感じていたなんて知らなかつた。自分だけがこの家族の中でつまはじきなのかと思っていた。圭が素つ氣なかつたんじやない、わたしが避けてたんだ そう、だつた。葵は今までと違う目線で家族を見ている自分に気付く。「圭、そんなつもりでお母さんたちは言つていたんじやないのよ。でも、そう思つさせていたのなら言つていたのと同じだわね ごめんね、圭」

いつもの自信満々でスーツをきつちつ着こなしている母親とは別人の、肩を落とした化粧の崩れた中年のおばさんがそこにいた。

「葵も苦しかつたんだね、きっと」

「うん、おれ自分のことでいっぽいで葵のこと、知つていたのに。壊れそつだと思つていたのに放つていて。ちゃんと聞いてやりたい、あいつの気持ち。受け止めてやりたいよ」

圭は堅く閉じられた扉に向かつて両手を揃える。

「そうだな、助かるわ、こんなにみんな願つてるんだから」

父親の目からついつと涙がこぼれる。

わたし、聞いて欲しい。わたしの気持ち。そしてお父さ

んの、お母さんの、圭の気持ちも聞きたい。だから生きたい。

生きたいよ。沸き上がる気持ちに葵は叫びたくなるが。

葵は声をあげようとしたが、気道を確保するために入れられた管のためにそれは出来なかつた。そして腕の傷が激しく痛む。

ああ、わたし自分の体に帰つてきたんだ。そうだ、生きるつて痛いんだ。体も心も。だけど神様、わたし生きたいです。葵は心からそう願つた。

「ん それは無理」

「ええっ？」

田は閑じているはずなのに、田の前にTシャツにデニム姿の少年が見える。自分と同じくらいの歳の痩せた体。少し長めの髪に一番田立つ、切れ長の蒼い瞳。

そしてこの発言……ありえないでしょう、普通。

「どういう事？」

「救急車呼ぶの遅すぎたみたいだぜ、あんた、もう少しつづいて立つことだ。家族の話について、うるうと見て田を離した隙に体に戾つちゃたみたいですよん」

す、すまんつて。といひで向でわたししゃべれるの？

### 3・死神との契約

「冗談、あたし絶対生きるつて。あんたも見てたらわかるでしょ、感動の場面。」**（）**でわたしが助からんでどうするのよ」

「どうするつて、だからおれが来たんじゃん」

「は？　じゃあんた、死神とかいうやつ？」

「さあ、**（）**ちぢやそう呼ぶのか？　まあ、呼び名なんてどうでもいいけど話は簡単。**（）**んとこ自殺するやつとか、しょうも無いことで死ぬやつとか多くておれらも手がまわんないんだよね。だから新人を青田買い　使い方これでいいのかな、まあ、早い話が勉強嫌なら仕事しない？　つてことで、スカウトしたわけ」

少年は手を出すと、心臓マッサージ中の葵の体から葵の靈体を引つ張り上げた。

「何すんのよ、勝手に出来ないでよ。わたし生きるんだから」「だからもう、無理なんだつて。こんなに魂がするつと出るつて」  
とは見込みないんだよ」

「いやだ　離せ、ばか、ばか」

「あんた、さつきのおばさんと同じことしてるぜ、乱暴だな。血は争えないな」

「つるさいつ」

手を振り払つて自分の体に戻ろ<sup>（）</sup>とした葵は、**（）**きだりやつて戻つたのかわからなくなつっていた。

「言つて忘れてた。営業成績のいい奴には、何と**（）**褒美があります  
もつたいぶつて手を広げながら言つた少年は、葵がふんつと横を向くのに慌てて言葉を続ける。

「**（）**褒美つてのは無事生還つてことだけだ  
何？　どうい**（）**こと？」

「**（）**の体を、ちょい植物人間的なもので生かしてやるから仕事しない？」

「何とか的とか言わないでくれる? 死神のくせして」

「使い方、間違つてた?」

「ひぬれこ、やつてやる。そしてあたしは生き返る」

「じゃ、ここにサインして」

少年は肩に斜め掛けしていた鞄から一枚の紙とペンを取り出して葵に差し出した。

「よく読んでつて言つてもひつかの言葉じやないからわからんかいが。とりあえず、ここに余白に名前書いてね。複写になつていてるでよろしく」

「変なこと、書いてないでしょ?」

「書いてないつて。期間限定の臨時職員扱いになつていてると契約満了の時、一定の成績以上なら本人の魂はこの世に留めておくことになつている。葵はそれでいいんだろう?」

「そうだけど、信用できるの、その話」

「おれを信じてつて、そりやさつとき合つたばかりだから無理かもしないけど。今はそれしか言えないな」

葵は紙を暫く睨んでいたがこのまま拒んでも死ぬらしきのはわかつた。それなら駄目もとであがいてみよっとペンを握りなおす。

「これでいい?」

受け取つた紙を簡単に手で追つて、空いている所に向やう少年は書き込みを始める。

「名前書いたあとに付け加えるつてどう?」

「ああ、これは今日の日付と担当者、つまり一応指導教官のおれの名前を書き入れたんだよ。契約成立です、澤田 葵さん。おれ教官の貫太郎です」

「かんたろう? 何よそれ、今風じやないよね」

「出された手を握り返して葵は言つた。

「ええつ? そななの? じゃあ何がいい? 松吉とか、義三郎とかどうだ?」

貫太郎の問いかに葵は答えず、ぐるっと肩を回す。

「で、仕事つて？」

「結構タフだね、死にかけてたのに」

貫太郎はははと笑つて鞄をさぐる。

「今日は俺の仕事見ていてよ。じゃ、行こうか

「うん」

葵は貫太郎について行きながらぐつと拳を握る。

絶対生きてやる。だからお母さん、お父さん、圭、早まつたことしないでね。命は大切なんだから生きるつて大変だ。

それと……服装のチエンジは譲れない。

紐無しのスウェットの上下なんてあんまりだ。それとあとは……。

いりつして葵の臨時職員としての生活が始まる。

「おー、行こうぜ」

貫太郎は歩き出したが、後ろに葵が付いて来ていないことに気が付き眉をひそめた。

「何なんだよ、行こうぜ」

「この格好じゃ、ここから一步も動かないから」

葵が盛大に鼻からふんっと息を出して言うのを、貫太郎は訝しげに見る。その格好のどこがダメなのかがわからない。動き易そうでいいじゃんか。実際、おれが無理やり着せたんじゃないし。

「変なやつだな。じゃあ何にすればいいんだ？ ドレスか？ 着物か？」

「いいから家に寄つてよ。着替えるから」

まつたくも一つもせえ、とつぶやきながら貫太郎は鞄から認識ナンバーが刻印されている、小さい金属のプレートが付いたペンダントを取り出すと葵の首に素早くかけた。

「何、これ」

「これないと無許可で魂を取つてる密猟者扱いになるんだよ。いいからかけとけよ。〇 〇 〇 〇 〇 〇、これが葵の認識番号だかんな」

「ひつて？ これどういう意味？」

「ああ、松竹梅の梅。梅のう、だ」

ひ一つ、格好悪い。後の記号も数字も気にはなるが、葵は意味なんて聞くんじゃなかつたとがつかりして自分の首にかける認識ペンドントを見下ろした。

「じゃあ行くぜ、おまえん家」

手を掴まれた葵は、思わず口から買袋が出るかと思つほどの驚きに声も無かった。貫太郎は猛スピードで真上に向かつて急上昇す

る。一旦止まるとそこから直線的に葵のマンションに田標を定めるや否や、ビルすれすれにまっすぐ葵を掴んだまま空中を一気に飛んでいる。考えもしなかつた展開に葵は口を開けたままだつたが、そのせいで五月のここのぼりのようになにかの中に遠慮なく空気が流れ込んでいく。空気の飲みすぎに注意しましょつ……なんてことを言つてゐる場合ではないのだが。

あつと言つ間に自宅のマンションのベランダの手すりの上に貫太郎は降り立つと、葵をベランダの中に降ろす。暴風のせいでまるでコントの爆発後のような頭になつた葵は、ふらふらとベランダの掃き出し窓の取つ手に手をかける。すると窓は鍵などないかのようにするつと開いた。

「開けといでなんだけど、鍵掛け忘れてたのかな」

葵の言葉にふつと貫太郎は吹き出しながら答える。

「俺たちがいちいち鍵に引っかかってたんじゃあ仕事なんてできないだろ。死にたくないやつがこそつてセキュリティに勵んでみる。俺たち居留守使われたセールスマンみたいじゃんか」

死神がいちいち鍵穴に針金つっこむわけもないか。納得。

誰もいらないリビングは葵が病院に運ばれていつたまで、血と水が床を汚していた。それを見て、葵は自己嫌悪の穴に落ちそなり、慌てて自分の部屋を目指す。

ドアを開け放つて、タンスを上から次々開けて物色するが、中身は季節が冬に逆戻りしたように冬物のオンパレードばかり。受験のときから家でいるときはスウェットだつた。おしゃれなんてどうでも良かつた。

それを言つなら何もかもがどうでも良かつたのだ。焦りながら今度はクローゼットの中を豪快にあさる。そしてやや皺のよつた長袖のTシャツとピターム、つまり貫太郎となら変わらない服を探し出した。

「何だ、俺と同じ格好がしたかったの？」

「つるさい、同じように見えて実は何倍もこつちのほうがイケてる

「んだから。とりあえず出して」

「なんで？」とか言つてる貴太郎を締め出して、バタンとドアを閉めると葵は着替えを始める。考えてみればちゃんと着替えて出かける準備なんて何ヶ月ぶりなんだろ。そう思いながらベッドを見る  
と、貴太郎がうつ伏せに寝つころがりながらネットで定期購入しているアニメ雑誌をパラパラとめくつていた。

「何であんたがそこにいんのよーつ、ヒツチ、ばか、死神」

「別に葵を見てたんじゃないし、いいじゃん。でも悪口に死神つて……センスないなあ」

「だつて」

「ところでもうここの？ もう行こうぜ」

「うん」

葵は部屋を出るとリビングをゆっくりと眺めた。

あたし、帰つてくるからね、待つてて。心の中でつぶやく。  
そこへ、おい早くしろと声が聞こえて貴太郎がベランダから手招きをしているのを見て葵はがっくりとうなだれた。

また、そこからですか、先生。

## 5・ターゲット（横山 真理子）

「あそこ」にいるのがターゲットだ。胸のところがオレンジ色に光つてるだろ？ あれが青く変わつたら俺たちの出番だ」

病院の一室で寝かされているのは二十代後半か三十代始め頃の女人。その周りを彼女の家族が取り囲んでいる。

「ああ、あんな小さな子どもを置いていかなくてはならないんだ、あのお母さん。心残りだらうなあ」

葵のつぶやきに貫太郎が鋭くつっこむ。

「だから俺たちが死ぬ前から張つてるんだよ。手際良く招魂できな」と搔つ攫われちまうからな

「え？ 誰を、何が攫うつて？」

「魔物たちだよ、あいつら迷つてる魂が大好物なんだ。喰つて自分に取り込んで膨れあがる。そして迷つた魂の悪意だけ「ヒー」してこの世に放つんだ」

「じゃああたしたちの仕事つて迷にそつな魂を確保する」と、なんだ

だ

葵のほうを振り返つて貫太郎はにこりと笑つた。

「そういう事、魂を招魂して冥府に確實に送ることが仕事だ。ゆえにおれたちは招魂士と呼ばれている」

「誰が呼んでんのよ」

「おれたち」

ここで見てるよ、と貫太郎は鴉に姿を変えて飛び出していった。

「カラスのかんたうつて、名前合いすぎだよ」

貫太郎を見送つて葵は小ちくつぶやく。

加奈ちゃん……ママ先に死んじゃつてごめんね。もう意識が無はずのこの思いは魂の思いなのか。自分を見つめるわが子がマ

「ママ、ママ」と言い続けければ母親が起きるのではと思つてゐるのかとうように呼び続けている。パパ、ごめんね。ひたすらに唇を噛んでいる夫にも真理子は謝つた。

そこへ自分の子どもとそう変わらない年恰好の少年が真理子の手に触れた。

「真理子さん、このまま死んじつていいの？」

少年の言つた言葉に驚いて真理子は少年を見下ろす。一体、この子は誰？

「死んじやつても加奈ちゃんを見守つていたくないの？ 好きな人たちと一緒にいたくないの？」

わずかに舌足らずの口調で、その少年は上田使いで真理子を見上げる。心配そうな気遣うような顔で。

「そりやあ、おばちゃんだつてここにいたいわよ。ぼく、どこから入つて來たの？」

「ねえ、ぼくと一緒に來てよ。そしたら真理子さんは家族の所へ戻れるから」

「本当なの？」

「もちろん……」

その少年の声を断ち切つたのは、どこから入つたのか、弾丸のように飛び込んできた鴉だつた。鴉はその鋭いくちばしで少年のふつくりした頬をえぐるようにつづく。

「何をするの？ 止めなさい、こひりつ」

大慌てに手を振り回す真理子の腕が鴉に当たつて、鴉は大きく飛ばされたが急ブレーキをかけたみたいに宙に止まる。

「おばさん、痛いじゃないか。あんた何騙されてんだよ。自分の子どもみたいに守つてやつてる奴の正体見てみろよ」

鴉の言葉に真理子は少年の姿を捜す。少年はうすくまつていたが、さつきまでの様子と変わつてきているのに真理子は気付いて、そこから大きく後ずさつた。

ボコボコと音がして体が膨れ上がつてゐるのが見える。その膨

らんだ部分からこすりつと鶴のよつた触手が一本、三本と突き出していく。

「痛い、痛い、痛い。真理子さん、助けてよ」

声は少年のままなのにその姿はまるで化け物だ。そこにかかる鶴の声。

「おばさん、あんたこいつの仲間になるところだつたんだぜ。それともこいつみたいな姿で家族の所に出かけて行く気か？ 加奈ちゃんもさぞ喜ぶだらうぜ」

「わ、わたしは……」

真理子の肩にぱたりと鶴が止まる。

「おばさん、天国に行つたつてここにいたつてあんたの家族はあんたの魂とともにあら、とおれは思つぜ。ゾンビみたいにうろついたつてあんたの氣は晴れやしない。加奈ちゃんやあんたの旦那の居場所を先に確保しとくつもりになつて行つてみないか。加奈ちゃんだつてお母さんが天国に行つてると思いたいはずだ」

「そつかしら？ そよよ、生意氣な鶴さん」

真理子の差し出した指を鶴が優しくつん、とついた。 真理子の体が青く光り出し、粒子のようになビー玉ほどの青い球体になる。それを鶴は咥えて窓を突き抜けて飛び立つ。 鶴を追つて長く触手が伸びていく。

「あ、つかまれる！」

葵が思わず口にした瞬間、鶴は元の貫太郎の姿に戻ると鞄からフイルムケースみたいな入れ物を取り出して球体を入れ、蓋を閉めて鞄に収める。 飛び上がつていた体が、今度は勢いよく化け物と化した少年に向けて落ちていく。 貫太郎はデニムの後ろに差し込んでいた物を素早く構えると、慣れた様子でセミオートのピストルのようなそれを触手の大元に向けると引き金を引いた。

ズイーンというピストルとはまつたく違う音とともに、白熱した光が化け物の中心を真つ直ぐ貫いてテレビでお馴染みの爆発がおこる。 化け物の体は小さいかけらになつて飛び散った。 べちゃり

と壁や柱、ベッド、その場に居るもの全てに粘着質の皮膚片が引つ付いたが誰も氣にも留めた様子は無い。 そのうちにそのスプラッシュな物は、ドライアイスのように煙りを出しながら消えていった。 繰りつく家族や医師、看護士たちの輪から目をやつと逸らして葵は立ち上がつて戻つて来た貫太郎を見た。

これが仕事、つてこんな事をわたしが出来るわけがない。

## 6・やるしかない

「ど、まあこんな感じなんだけど。あれっ？ 葵びつしたの、表情の暗い葵に貫太郎は戸惑いながら声をかける。ちょっと最初から飛ばしそぎた、か？」

「あんな化け物と戦うなんてわたしが」めんだわ。むり、むり、「そんなのやつてみなければわかんないだろ？」

「何よ、やつたつて出来ないものは出来ないんだからつ。頑張れば出来るとか言うとぶん殴るわよ」

貫太郎の言葉に、葵は貫太郎を突き飛ばすと噛み付くように叫ぶ。「おいおい、突き飛ばした後にそれ言つの反則だぜ。それによればいと思つからやんないとか、わけわかんねえ。だつて葵、選択の余地ないだろ。やる、やらない、じゃなくてやるしかない。これ書いたの葵じゃん」

貫太郎が鞄から書類を一枚取り出してひらひらと振つた。  
なんて意地悪い奴なんだ。

葵は貫太郎を睨み付けると、貫太郎の手から書類をひつたくつてびりびりと引き裂く。『まあみる、わたしは精神的に傷を負つているんだ。ちょっとは氣を使え、と葵は破いた書類を花吹雪のように貫太郎の頭から降らせた。

「何やつてんの？ 死んでもいいのかよ。おまえつて本当に自分の事しか、いや自分のこととも考えてないんだな。まあいいや、やつき葵が破つた書類は「ペーだし」

「「ペー？」

貫太郎の言葉のせいで、威勢をそがれた葵の額にびしりと指が突きつけられる。

「おまえ冥府との契約をなめてたら酷いぜ。紙きれ破つたつておまえの魂は冥府が握つてるんだ。わあわあ騒いで迷惑だとおれが思つたらまつさきにおまえの魂を招魂するからな。黙つて仕事を覚えや

がれ。おれは死神、なんだろ？」

さつきまでとはうつて変わった貫太郎の態度に、葵は震え上がりでうなずくしかなかつた。あんまり貫太郎が普通の男子だつたら。いや鴉になっている時点ですでに普通じゃないのだが、うつかりしていたのかもしれない。葵は貫太郎が死神だということを軽く考えていたらしい。

「くくりと唾を飲み込んで、葵はおずおずと貫太郎を見ないよつて視線を外す。

「わ、わかつたわよ、やりやあいいんじょつが。じ、じゃあそのピストルみたいなの貸してよ」

偉そうにいうわりにはしつかり言葉は震えていて。貫太郎は真面目な顔を作つていることが難しくなつたのか、息を止めていたかのようにふはつと息を吐いた後大声で笑つた。

「やっぱ葵つて面白いな。でもさ、葵に銃は危険すぎる。極度に怖がつている奴ほど恐ろしいものはいないからな。敵見方無差別に銃を乱射される危険性が高い。小さい物音に驚いてそこら辺大量虐殺なんてされたらおれが冥府にとつ捕まるからな」

「じゃあ丸腰でやれと？」

まあまあと言いながら貫太郎は鞄から刃渡りが二十センチほどの片刃のナイフを取り出した。皮の鞄に入つているのをスラリと抜くと、青白い光を放つて剥き身の刀身が姿を現す。

結構肉厚の刃だが先のほうが濡れていよう見える。それを恐る恐る受け取つた葵が一振りすると目の前の空間に一本の線が、振つたナイフの後をたどつて一瞬見えて……消えた。

「おい、気をつける。それは空間」と斬つちまつからな

「空間」と。

「そういうこと。まあ葵にはさつきみたいな奴が出てこない、楽なのを振つてやるから心配するな。そのナイフもいざつて時以外は仕舞つとけよ」

貫太郎はそう言つとナイフを葵から取り上げて鞄に戻し、葵のテ

「ムのベルト通しに括りつけた。

「ちょっと休憩しに行こうぜ」

言いながら貫太郎が、葵の手を取る。その訳に気づいて葵は無駄と知りつつも提案を持ちかける。あれだけは嫌だ。

「歩いて行きたいんだけど」

「そんな余裕は無し」

「いやだあ」

葵の叫び声を残して、一人のすがたは空に消えた。

## 7・天国と地獄

一人は病院の屋上から並んで景色を眺めていた。

「真理子さん、天国行けるかなあ。ねえ貫太郎？」  
「はあ？」

葵の問いに間の抜けた返事を返す貫太郎を、葵は不思議に思つて見る。

「だつて貫太郎がさつき言つてたでしょ？ そعدよねえつてわ

たしも思つたもん」

「天国なんてないよ」

「はあ？」

今度は葵が間の抜けた声を出す。

だつてさつき言つてたのは貫太郎じゃないの。

「あのさ、おれたちが自分のことを死神だと言つていないと同じように、あんたらが思つているのと実際は違つてことさ。死んだら魂は招魂されて冥府に送られる。そこは別に天国やら地獄、極楽まあ宗教によつていろんな名前があるみたいだけど、分かれているわけじやない。魂の等級によつて冥府に留めて置く物と、あらかた記憶を消してこの世に送り出す物に選別されるだけさ。がつかりした？」

心配そうにのぞき込む貫太郎に葵は少し、と答えた。が、わたしたちの魂がそんな物扱いのようにこの世と冥府の間を還流しているなんて本当は、ちょっとどころか大いにショックだった。魂はもつと崇高な扱いを受けるはずと。宗教なんて正月の初詣と合格祈願のときしか頭に無かつた葵でさえ、漠然と思つていたのだ。

「で、おれたちはその冥府の職員。招魂課つてとこに籍を置いている。あと、選別課は職人気質のやつらばかりだ。気は良いんだが仕事にはうるさい連中だ。それから情報課の連中ときたら口ばつかで手抜きしやがる。そのせいで前世の記憶が残つてゐる人間がそこら

中において大変だぜ」

「先生質問いいですか」

何？と首を傾げる貫太郎に葵は手を挙げながら聞く。

「天国が無いのなら、現実に今時点で酷い扱いや悲しんでいる人は救いが無いってこと？」

「おれにそんな事聞くなよ。んーつそつだなあ」

貫太郎は腕を組んで葵から田をそらせ、今までがつっていた手すりによつと黙つて座る。

「虐待や病気、貧困、不慮の事故で亡くなつた魂はそりやあ表面は傷んでいるけど、一皮剥けば澄んだ綺麗な色をしているんだぜ。記憶を消されたらすぐに現世に戻される。どどのつまり、天国つてのは現世のことだ。夢のような天国も恐ろしい地獄も人の頭から産みだされた代物だからな。人は天国、地獄どちらも併せ持つて生きてる。苦しい今を精一杯生きて死んだら天国に行く。そう思つのはあながち間違いぢやない。あきらめないで生きることを知つてゐる者はきっと次の人生は楽しく生きられると そう、思わない？」

「う……まだよくわからない。貫太郎の言いたいことはわかるけど綺麗事すぎるよ」

「そうだな、綺麗事だな」

素直に貫太郎はつぶやいて遠くを眺めている。その寂しそうな横顔に、貫太郎の過去にも何かあつたんだろうかと葵は思つた。わたし一人が悲しい思いをしてきたと、不幸だから不遜な態度も何も許されるべきだと、そう思つていた。

もつと皆わたしの話を聞いて。こんなに頑張つているのに報われないわたしを可哀想だとなぐさめて。頑張つたんだからやつくりしていいよ、わかつていてると甘やかして欲しかつた。楽しそうに暮らしていけるあんたたちはずるいから。

わたしには権利があるんだと、声高にわめく様な思いで今までいたことに葵は気づく。

「ちょっとその辺でストップ」

「何？」

貫太郎に話しかけられて葵は、心の中の独白を貫太郎に知られることに気付いて顔を赤くした。さっきの恥ずかしい自分よがり発言を聞かれたのかと思うと全身から火がでるようないたまれない気持ちになる。

「自分の事、そんなふうに冷静に見れるようになるなんて成長早いな。だけどあんまし批判しすぎると今度はそっちの穴に落っこちるぜ。まあ自己分析もほどほどに、だ」

鞄からスケジュール帳らしき物をチェックした貫太郎は、それを鞄に戻すと立ち上がって葵に手を差し出した。

「あとはユルイのばかりだ。ちゃつちゃつと終わらせようぜ」

「あーわたし、階段で下りたいんですけど……先生？」

「遠慮すんなつて」

「遠慮じゃない、貫太郎のばかーつ」

葵の言葉は絶叫になる。手首を貫太郎に掴まれたまま、激しい風にもまれながら映画の連中は「そをつくなー」と毒づく。この暴風の中で笑顔なんて出来るわけがないじゃん。

後ろを振り返ると、遙か後方の校舎の陰から貫太郎が行け、行けと手を上下に振っている。まるでしつ、しつと犬でも追つ払うみたいな仕草に、くそつと声に出しながら葵は歩き出す。  
下で待つてようか、それとも……と、少し考えて葵は学校の校舎の階段を上がる。

オレンジ色から青色に変わつたら名前を確認して魂をこの容器に入れて終わり。オレンジ色から青色に……繰り返しながらわざとゆつくり階段を上がる。大したことじやない、入れて終わり。カップスープなみのお手軽さ。あつと言つ間に出来上がり、だ。大丈夫、大丈夫、わたしだつてこのくらい出来るに決まつている。

他のことを考えないように、貫太郎から受けた注意事項をぶつぶつ言いながら、葵は頑丈な鍵のついた進入禁止のための金網をすりぬけて屋上に向かった。

## 8・ターゲット（松島学）

「お、おれは死ぬんだ。先生、上がってくるなよ」  
上ずつた声を上げる松島と書かれた名札を付けた体操服姿の高校生が、屋上の端っこから下から見上げる担任に向かつて叫ぶ。  
「えーと、君、松島学君ですか。歳は十七歳でいいんですね」

「あ、あんた誰？」

下にばかり気を取っていた松島学は、背後からいきなり話しかけられて驚愕に目を見開いた。鍵をかけていたはずだ。何でこんなところに女の子がいるんだ？　しかもちょっと可愛い子だ。前髪から耳の後ろまで入れているシャギーのせいで前から見るとわからないが、今みたいに横を向くと背中まで届く長い髪なのがわかる。黒い体の線に沿つた長袖のTシャツ。足首でくしゅくしゅと弛ませたぴつたりしたデニムが、少年っぽい中にもほんのり女の子らしさを醸し出して……ああ、おれ死のうと思ってんのに何で女の子の服を解説しているんだ。がっくりとする松島学にお構いなくその女の子は続ける。

「で、どうなの？　君は松島君でいいんだよね？」

「あ、はい。でもどうして知ってるの？」

松島学の質問に女の子は初めて狼狽した様子で、いやあと何か何か言いながら横を向いた。

「うちの学校じゃがないよね」

「ああ、わたし高校生じゃないか！」

「え？　中学生なの？」

「じゃ、なくてわたし高校浪人なんだ」

びっくりして松島学は目の前の女の子を見すえた。勉強嫌いで遊んでいる風にはとても見えないが。それともよっぽど入りたい学校なのか。いずれにしても高校浪人とは珍しいし、親も良く許したもんだと松島学は自分の母親を思い浮かべる。口うるさいし、

晩飯はいつも帰りに寄るスーパーのお惣菜売り場の残り物だ。だけど一日も休むこともせずに朝から晩まで働いていた。それでもパート勤めでは毎月一十万そこそこくらいしか稼げない。

とくに四十を過ぎたパソコンのキーボードすら触ったことがない女性に、なかなか時給のいい仕事があるはずも無く。ただ、日々の暮らしの為に働く毎日。なのに俺はバスケットの強化選手から漏れてしまつた。今まで推薦で入れるだらうと、ろくに勉強もしていなかつた。今更どうしようもないが、高卒で働くなんてばからしいと変なプライドが苦しくて、発作的に屋上に上がつてしまつた。

「だから死ぬの？ 松島君」

「え？」

「あ、ごめん。今、心の中ちょっとのぞいちゃつたみたい」

そう、言つてから葵は自分でびっくりしている。人の心を死神は覗けるのか？ でもそれは、対人間だけなのか。貫太郎はわたしの心を読んでいたけど、わたしは貫太郎の心なんて分からなかつた。

そして、葵は今更ながら入つて自分の殻に閉じこもつている間は、周りが、いや自分のことも見えてないんだと思つた。

どうして、そんなことで死んじやうの？ 君の魂はこんなにオレンジ色に輝いているのに。

「だつたら今から勉強すればいいじゃない。まだ一年もあるのにあきらめるの早くない？ でさあ、推薦じゃだめなら夜学だつて何だつてあるじゃない。学生向けのローンだつて何だつて……道は途切れているわけじやないじゃん」

自分で言いながら葵はそうだ、と思つ。

今までこれしかないと他のドアを開けなかつただけで、実は自分の前には無数のドアがあつたんじやないのか。ばかなのはわたしだつた。

「お、おれ生きるよ。君さ、天使なんだろ？ おれを助けるために

来てくれたんだ」

えつ？わたし何しに来たんだっけ？あ、そうだ。この人の魂を招魂するために来たんだつた。でももう死なないって……。ま、まあ人助けってことでいいよね。

「天使じゃないけど……わたしもう行くね。頑張つてね松島君」この場合帰りは階段から下りるのは流石にまずいと、屋上の手すりに葵はよじ登る。ぐるりと松島学に手を振つて笑顔を見せると必死の形相で飛び降りた。激しい風の中、貴太郎のように飛び、ことは出来なかつたが体が叩きつけられることも無く葵は足から着地する。

「おまえ、何やつてんだよつ」

そこへかかる厳しい声に、葵が声の主の方へゆっくり顔を向けると、いきなり平手が飛んできて葵は尻餅をついてしまつた。

「何するのよ、しょうがないじゃない。死ぬの止めるつて言つんだから」

「ばかやろつ、青く変わるもの待てつて言つたじやないか。何で才レンジ色の時に話しかけたりしたんだ。滅茶苦茶だ」

「それは悪いとは思つてゐるけど、何にしろ死ぬのを止められたんだからいいでしょ」

葵の最後の言葉に貴太郎は冷たく答える。

「おれたちは人助けが仕事じゃない。招魂するのが仕事なんだ。余計なことは止めろ」

「はあ？」

貴太郎の返事に葵は怒り狂つて、貴太郎の頬をグーでなぐりつける。

「ばかはあんたよ、この腐れ死神！何、冷たい事言つてんのよ。あんたなんか大嫌い」

そう言いながら葵は自分が泣いていたのに驚いた。

すぐ泣く女なんて最低だと思っていたのに今の自分は最低だ。だつて貴太郎があんな酷いことを言つうなんて……悔しいからだ。

良い奴だと思っていたのに。

一方、大人しく殴られた貴太郎は、唇をかみ締めながらしばらくその場に立っていたが。

「おれは行くところができた。おまえは自分家のマンションの屋上で待つてろ」

そう言い放つと、葵の返事を待たずに貴太郎は鳩になると北の方角へ鋭い弧を描いて飛んで行つた。

残された葵はもやもやとした気持ちのまま、とにかく自分のマンションへと歩く。が、気持ちはどうぶりと底なし沼に落ちたようにな沈んでいた。

わたしがいけなかつたの？ そりやあ貫太郎の言いつけには背いたかもしないけど。でも、その代わりに人助けができたんだよ。良くやつたと褒めてもらえたと思っていたのに。あいつはやっぱり死神だから人の生き死になんてどうでもいいんだ。

そう、思つて軽蔑してやろうとしてもなぜか悲しくて、葵はずつと涙がとまらなかつた。

歩いていると、前方の交差点近くに人が集まつて車が渋滞している。葵は気になつて、家とは反対になる側に向きを変えた。

救急車とパトカーのサイレンの音が聞こえ、交通事故らしいと葵は見当をつける。野次馬に声をかけていると、一人のおばさんが振り返つて葵に応えてくれた。おばさんは痛ましそうな顔を見せながらも、いつきに喋り出す。

「軽トラックの前にあの女人が飛び出したんですつて。自殺からねえ。それならトラックの人は巻き添えになつたつてことでしょう？ 死ぬんなら自分一人でいけばいいのに。女人を轢いたトラックは、急ハンドルを切つて街路樹にぶつかつちまつて運転手もすごい怪我だよ、まったく」

何て酷いことに と見ている葵は、救急車に載せられる女人の胸元が青く光るのを見つけて胸が詰まつた。

ああ、あの人は助からない。

そこへ一羽の鶴が舞い降りて、女人の胸元から何かをすくうと飛び上がつた。

「貫太郎！」

「お母さん！」

自分と同時に声が聞こえて声のほうへ顔を向けた葵は、愕然と救急車に駆け寄る高校生を見つめた。それは葵が助けた松島学本人だった。

なぜ、どういうこと？　これは偶然なのか……。

マンションの屋上で待つ事一時間あまり。膝を抱えて座る葵は自分の足元の数歩先に舞い降りた靴先を認めて、顔を上げた。

「どういうことなの？」

「言いたくない」

小さい子どもみたいな言い方に葵は不覚にも口元を一瞬ゆるめたが、聞かないわけにもいかない。

「そんなんだめだよ。ちゃんと教えてくれなきやあ」

「指名された人間の魂を招魂できない場合は、他の魂を招魂することになる。その場合初めのときより悲惨になることが多い」

台本の台詞のように一本調子で早口に貫太郎は言つて横を向く。

「そんな……」

だつて生きるつて言つたのに。前島君の魂はあんなに暖かい色で輝いていたんだよ。だけどだめなの？　わたしのせいで前島君のお母さんが死んじゃうなんて、あんまりだ。

そこで葵はびっくりと冷たいもので背中を撫でられたように貫太郎を見た。

「わたしの魂を招魂しようとしてたんだよね、貫太郎。だつたらわたしが死なないのなら一体誰の魂を持っていくつもりだつたの？」

「……それは」

「それは、何よ」

貫太郎は、いろいろと靴の先でセメントの床を蹴り付けながら落としてしまった言葉を捲すように首を左右に振つた。

「だから葵を仲間に引き入れたんだよ」

あーあ言つてしまつたと言いながら貫太郎は、葵の前を通り過ぎ

て屋上の際に立つ。

「おれも葵と同じことをしてしまつたつて事。だけどそのせいで、おまえの家族や他の人間が死ぬのも見たくなかつたんだよなあ、おれつて本当に人好しだあ」

「つて、どういうこと?」

「回収できない魂分働くかなきやならないつてことだよ。葵もおれも、魂一人分つていつても罰分が加算されているからな。結構大変なんだ」

そういうことだつたのか。わたしは自分が生きる為、自分の命の代償と懲罰分を働くかなくてはならないのだ。そして働きが悪かつた場合はそのまま招魂されるということなのか。貫太郎は運命共同体であると同時に最悪、死刑執行人の役目を果たす役割をもつてゐる。

「まあ、なんだ。どうせだめなら振り出しに戻るけど、さくっと招魂してやるから」

「それ、なぐさめになつてないよ、貫太郎」

「うーつ」

うなる貫太郎の手をがしりと掴んで引き寄せるといつた。驚く貫太郎を見上げて葵は笑顔を見せる。

「ありがとう。わたしにがんばれる余地を残してくれて。自分次第で生きる事が出来るかもしねいんだつたら、わたしはがんばつちやうよ。わたしの命が助かつても他の誰かが死んじやうなんてまつひらだからね。わたしが自分でやらかした事の始末はやっぱり自分でつけなくちゃあ。それよりわたしの分、貫太郎にも追加されてるんでしよう? ごめんね」

「えつと、それよりこの状況のほうがあれにはきついんですけど。やつぱり女の子に抱かれるより、抱きたいつていうか、……」

貫太郎の言葉に、自分がかなり大胆なことをしていふことに葵は気付いて慌てて手を離す。耳がかあつと熱くなつて頬に触ると、そこもかしこも熱くなつていて。もしかして自分は真つ赤なんだ

るつかと思つてまた熱くなつてしまつた。

「何やつてんの、帰るつぜ！」

貫太郎に手を掴まれながら暴風の中、でもやつぱり「これは嫌だと葵は叫ぶ。 贤太郎は空高く飛び上がつたところで止まり、ぶつぶつと何かを呟く。 するとそこへ、田畠を彫つて造られたような扉が現れて開く。

「これつて地獄門？」

「地獄つちや地獄だけど天国でもあるんだつて。回収した魂を提出しなきやなんないし、今日は疲れたし。現世じやおれたち熟睡は無理なんだよ。とにかく枕が替わるとおれ、寝られないんだ」

開いた扉をくぐると空を飛んでいたはずの一人は、舗装された一本道を歩いていた。薄曇りの空は今にも雨が降りそうだ。そのせいか、纏わり付くようにねつとりした空氣に葵は包まれている。道の左右に広がっているのは、立ち枯れた低木の茂みが見渡す限り延々と続く荒涼とした風景。葵にはとてもじやないが、ここが天国もある、とは思えなかつた。

「雨が降りそうだよね」

「雨？」

葵の声に不思議そうに、貫太郎は空を見上げる。

「ここはいつもこれだぜ。これ以外の天氣なんて見たことないな。ああ、あれだよ目的地」

貫太郎の指差す方に顔を向けて、葵はあつと息を飲む。さつき通つた門の扉と同じ材質の石造りの巨大な建物がいきなり葵の目の前にそびえていた。いんづつ陰鬱な印象の建物の正面玄関の階段を貫太郎が、軽快に駆け上がる。そのようすになんとなく重い気持ちで葵も続く。そこは大きな城壁に囲まれた、一つの町ぐらいある建物だった。まるで迷路か植物の根つこのように複雑に入り組んでいる通路の左右に、無数の部屋を繋ぐドアがある。

「ここが冥府なの？」

「うん、おれにぴつたり付いているよ。迷子になつてそのまま浮遊霊、つてことになるぜ」

言われなくても一人で出歩く気になれないほど、葵は心細くて貫太郎のシャツの裾をいつの間にかしつかりと握りしめていた。しばらく右に行つたり、左に行つたりして、貫太郎は、高さが四メートルはありそうな観音開きのドアの前で止まつた。

その扉の横に、警備員のような服装の一メートル近い男が左右に

立っている。その男の一人に貫太郎は胸の認識ペンドントを見せると、扉が一人分くらい外側に開く。

「ちょっと、ここで待つて」

ええーっとすがるような顔をみせる葵を残して、貫太郎は扉の中に入つて行く。すると扉は音もなくぴたりと閉まつてしまつた。ここで待つて言わても……と廊下の壁に背中を預けて葵はぼんやりと扉の前に立つ警備員を眺めた。地獄の警備に付いているのは、牛鬼とかじやなかつたかしらと思つてみる。だがこには、天国、地獄というものじやなかつたんだと改めてぐるりと頭をめぐらした。

「あれえ、一般の魂が紛れこんじやつたの？ お嬢さん」

その声に横を向いた葵に、大学生風の若い男がこつちに向かつて歩きながら声をかける。

「一般じゃないみたいだな。同業者だよね、今日は。ぼくはギルつていうんだ。君は？」

「あ、葵です。澤田葵」

見た目はどこから見ても日本人なのに、ギルなんて本名なんだろうかと思つてゐる葵にギルは素つ頓狂な声をあげる。

「澤田葵つて、それ生前の名前でしじうが？ 何君、ぼくをからかつてんの？」

「生前の名前……？ わたし死んでないけど」

「死んでない？」

ギルは真面目な顔になつて側まで来ると葵の認識ペンドントを手に取つて見る。そうして納得したように笑顔を見せた。

「ごめん、誤解してたみたい。君、臨時職員なんだ。で、誰についてるんだ？」

「えつと、指導教官は貫太郎先生です」

葵の返事にギルは、さつきのように首を傾げると何も言わずに葵の認識ペンドントをひっくり返して見る。

「クラスS級……つて、このナンバーはバルス……。きみの先生つ

てバルスなのか」

ぎょっとした顔で、ギルは扉を振り返った。

「Jの中に今、バルス、いやきみの先生が入ってるの？」

「そうだけど」

「あ、俺、また後で来るわ。またね、かわい子ちゃん」

へつ？ とわけがわからない葵を残して、ギルはばたばたと足早に立ち去ってしまった。

一体、どういう事なのか。招魂士は死んでいる者なのか。じやあ貫太郎も死んでいるの？ それにバルスって貫太郎の事？ 葵は自分の認識ペンドントの裏を見てみたが、それはまったく意味がわからない象形文字のような物が書かれている。葵にはさっぱり何のことかわからなかつた。そこへ開く扉。

「葵、お待たせ。おれの家に行こうぜ」

待たせたな、とにっこり笑いかける貫太郎に、落ち着いたらはつきりさせる事が山ほどある。そう葵は、鼻息を荒くしながらも貫太郎の顔を見てほつとしていた。

入り組んだ通路を、それこそひたすら歩かされ、文句の一つでも言つてやうと葵が決心した時。貫太郎が一つのドアの前で立ち止まって、胸の高さにある艶のある金属プレートに自分のペンドントをかざす。すると、かちりとロックが解除された軽い音がした。「どうぞ、部屋散らかつてるかもしれないけど」

そう言つてドアを開けて入つて行く貫太郎の後ろから、おずおずと葵も部屋に入る。部屋は八畳くらいの洋室で作りつけの平机が壁に付けてある。そして反対側の壁にベッドがあつた。奥がクローゼットになつてゐるようで、反対側は普通なら窓があるのだが、ここには窓らしきものは無い。散らかつてゐるどころか何も無い、やけに生活の匂いのしない部屋。

「とりあえず、おれは床に寝るよ。じゃ、おやすみ」

クローゼットから毛布を取り出していきなり寝よつとする貫太郎に、葵は慌てて声をかける。

「ちょっと待つてよ。『ご飯とか、おふろとか、洗濯とか、トイレの場所とかいろいろ言つとかないど、だめなことがあるでしょ?』葵の言葉に、貫太郎は弾かれたように起き上がりつて笑つた。

## 11・死神の正体

「ちょっと、何よ。何がおかしいのよ」

「ああ、ごめん。本当に葵つておもしろいよな。今さ、葵つて体から魂だけ出ているんだぜ。魂が飯食つたり、風呂入つたり、しょん便したり……あ、失礼、トイレに行つたりするわけないじゃん。そんなどつたら富士の樹海の中なんか糞だらけ……おつとまた失礼」

「 どうか。でもどつたら何で寝るの？」

「おれ達みたいに招魂士になると、魂には休養だけは必要なんだよ。どうして？ とか聞くなよ。おれも知らないんだから。たぶん、魂だけの存在なのに実体があるつていうのが理由の一つだな。冥府の職員には体が与えられているから」

貫太郎は、言うだけ言うとじやあと毛布を被つた。しかし、その毛布は葵によつて直ちにはがされる。

「何だよ、寝かせろ」

「ちょっと、まだ聞きたいことがあるんだから」

「つひるさい、おれは寝たいんだよ。おまえ、旅行とか行つたら朝まで起きていて、誰が寝言言つたとか、寝られないよおとか言いながら人の睡眠邪魔するタイプだろ。おれは寝る。質問は明日、以上」

毛布を頭まで被つて葵に背中を向けて貫太郎はすっかり寝る体制になつてしまつ。葵は、くそつと思つたが仕方なくベッドに潜り込んだ。目を閉じてみると、葵も疲れていたのかすぐに眠りに落ちていつた。

「おい、葵起きろ」

貫太郎に体を揺すられて、葵はぎくりと目を開けた。

何で何で

……？ すばやく左右を確認してそのうちに記憶も蘇る。 そうか、わたし貫太郎の部屋に泊まつたんだ。 初めての外泊が男の子の部屋なのだが、怒る親も今は近くにいない。 まあ怒られることは何にもなかつたんだけど。

「おい、いつまで起き抜けの気分に浸つてるんだ？ 行くぜ」

朝の支度も何にも、いきなり仕事なのかと、葵は名残惜しそうにベッドを離れた。 確かにお腹はすいてないし、寝乱れているわけでもない。 服も汚れてない上に体も汗をかいていたと思っていたのにその後もない。 わたしは今田ぶらりんなんだと葵は思う。わたしは死んでない、俗にいう生靈つてことなんだろう。 こんなにしつかりと立つていてるのに。

そして貫太郎は死んでいる……のか。

「貫太郎、あなたは死んでいるんでしょう？ でも人は死んだら魂だけになつて生まれ変わるつて言つたくせに。 じゃあ、貫太郎やギルたち、冥府の職員つてどういう事なの？」

「ギル……？ こここの職員の誰かに会つたのか。 まあ、話はそこじやないか。 おれ達は確かに死んでる。 けど前に言つたと思うけど魂は等級に分けられる。 冥府から送りだされるのは等級のいい奴ばかりだ。 残りの最悪な等級の魂は冥府に残つて 分かるだろ？」

「最悪つて」

葵はぐくりと唾を飲み込んだ。 それつてつまり、貫太郎は生前犯人者だったの？ そんな馬鹿など打ち消したいが、貫太郎の真面目な顔がそれを肯定している。 贊太郎は咳払いをして葵に向く。

「そりなんだよ、おれ達はこの世に生まれ変わるためには前の罪に刑罰を加えた年月、冥府の職員として働かなきやならないんだ。 しておれは慶応三年に死んだ。 西暦で言うと千八百六十八年だ」

今は西暦、一千七年だ。 ということは貫太郎は今から百三十九年も昔の人だったんだ。 葵はそして百三十九年もの年月、冥府職員として働いている貫太郎の罪の重さに身震いする。 一体この人は何をしたの？

「貫太郎」

「なあ、いろいろあるだろ？ナビこの際、置いといてサクッと魂を招魂しようぜ。葵は後三つ仕事をこなせば現世に戻れるんだ。おれの事に関わったって何になる？ 行こうぜ」

貫太郎はそう言つと、先に部屋からさつさと出て行く。残された葵も後に続くが昨日、自分に話かけてきたギルが何か言つていた、と思ひだす。貫太郎の事をSクラスと言つていた。

貫太郎の名前をバルスと言い そしてとても怖がつていた。

## 12・ターゲット（川崎修）

三世代が暮らす一軒家の南側。 小さい庭に面した部屋に敷かれた布団の上に寝ている老人。 その周りにはその妻や子どもたちが取り囲んでいた。 横にいた医師が静かに告げる。

「『臨終です』

「お父さん、さよなら。ゆっくり休んでね」

妻らしき年かさの女性がそっと老人の頬に触れた。 子どもたちも静かにうなずいて目元に手をやる。 葵の目の前で、老人の胸元がオレンジ色の光が青い色に変わる。 なんて暖かい色なんだろう。 同じ青だというのによつて、その時の事情によつて、人柄によつて青色にも違つてあるのだ。

「お嬢さん、わたしを迎えてください。お世話をなります」

今、目を閉じたばかりのおじいさんが葵の隣、つまり南側の窓の外に出てきて話かけてきた。

「おじいさん、川崎修さんですか」

「そうですよ」

葵の問いにこくりとうなづいた川崎さんは、自分の体に取りすがる家族の姿に微笑んだ。

「いいもんですね、ああやつて惜しんでくれるのが見れて」

「川崎さんは、まだそんなにお歳じゃないと思つんですけど、未練とかないんですか」

はははと川崎さんは笑いながら、窓から視線を外さずに答える。

「わたしは肺がんでしてな。余命半年とか言われておりました。も六十九歳でまだまだ現役のつもりでいたもんだから、そりやあがつくりするわ、腹が立つわで妻や息子たちにあたりちらして大変でした。でもね、わたしがいなくては一日だって店が立ち行かないと思つていたのに、あれですね。何てこともなく息子が上手い事回して

たんですよ。知ったときには辛い気持ちもありましたが何か ふつ切れました」

川崎さんの視線の先には、子どものように泣いている四十すぎの男の人がいた。

「一哉は、一哉つていうのはほつちの息子の名前なんですが、あの通り昔から泣き虫でねえ。店も中々任せられないと思っていたのに、嫁がしつかりしていたんで何とかなつとるんですけど。きつい女だと思っていたのに、こんな時には本当に頼りになる。人を見る目はあると思っていたのに、人間はいくつになつても教えられる事ばかりですね」

「川崎さん

「ああ、すいません。時間を取らしてしまいまして。行きますか、お嬢さん」

川崎さんの姿は、ふいつと消えて宙に青く美しい玉が浮かぶ。葵はそれを大事そうに掴むと貫太郎から預かつた容器に仕舞い、二ムのポケットに入れた。

「川崎さん、あなたはとても綺麗な青色でしたよ。すぐにこっちへ戻れますからね」

ポケットに触れながら葵はそつとつぶやく。

生垣の外から一部始終を見ていた貫太郎は、葵の仕事ぶりにほつと息をついて大きい身振りで葵を招いた。

「はい、これ。川崎修さんの魂」

「ああ、」苦労さん

「次は?」

容器を受け取った貫太郎が、申し訳なさそうに葵に告げる。

「もひ、一件あるんだけどこの調子で一人で行つてくれる? おれ緊急に仕事が入っちゃつてさあ。終わつたらおまえのマンションの屋上で待つてて。おれの使役してる鴉をお供につけるからさ、何かあつたら連絡しろ。名前は「ちょっと白」だ。おれも直ぐに片付けるよ」

「了解。地図と名前、魂を入れる容器をちょうどいい」

葵が差し出した手に諸々を渡すと、貫太郎は鴉に姿を変えて飛び立つていった。

残された葵は、さつきの態度とは裏腹に少し心細い気持ちを抱えながら、貫太郎が呼びつけたくちばしのところが少し白い鴉を見上げる。

「あんた、頼りになるの？」

そのカラスは葵を見下ろして、カアと鳴いた。

次の仕事の場所は、今いる場所から十分とかからないくらい近い産婦人科の病院だった。受付を通り過ぎた葵を誰も気付く者はいなかつたが、待合で待っていた妊婦の一人が葵を咎めるように見送ると独り言を言った。

「高校生よね、何かしら。きっと遊びで子どもが出来ちゃったんだわ。この子が産まれたらしつかり躰なきやあ」

ポンポンとお腹を擦りながら、その妊婦は付き添つてきた夫に話しかけた。

「ねえ、パパ。今高校生くらいの女の子が通つたわよね」

パパと呼ばれて嬉しそうに顔を向けた彼女の夫は、笑みを浮かべたまま首を振る。

「……いや、誰も通つてないけど」

### 13・ターゲット（高橋未来）

葵は自分が待合にいた妊婦の一人に姿を見られた事も知らず、階段を上がっていく。魂が青く変わる前の松島学や野次馬のおばさんには見えていたようだが、その人以外は葵を見る事は無かつた。つまり靈感の在る無しで今の葵は見えたり、見えなかつたりする。だが、靈感のある人にとってはかなり実体を伴つた形で違和感無く見えているらしい。

「えーと、三百三号室よね」

カラリと引き戸を開ける。中にはパジャマ姿の女人人が、可愛いレースの飾りのついたお富参りの時に着るようなベビードレス姿の赤ちゃんを抱きしめている。その赤ちゃんごと、父親らしき若い男性が包むように抱き寄せている。そこに華やぎがないのは、二人の双眸から静かに流れているのは嬉しい涙では無かつたからだ。良く見ると赤ちゃんは固く目を閉じていてぐつたりとしている。葵が次に迎えに来た魂は、死産で死んだ子どもの魂だった。

「この子と一緒にわたしも死んでしまいたい」

掠れた声で言う母親は、もう何時間も泣いていて声も枯れてしまつたらしい。

「ばか、俺は娘を「くして同時に妻まで亡くすことになるのか？この子が、未来が天国に行けるように一緒に祈ろう。何度も泣いていいから。俺が側にいるから」

「未来、ごめんね。ママを許してね」

母親に抱かれた赤ん坊の小さな胸が、オレンジ色から水色に近い澄んだ青い色に変わる。

「高橋未来ちゃんだね、迎えにきたんだけど」

顔を覗き込むように葵が近寄る。

「うん、生まれる前から、名前で呼びかけてくれたんだよ。だから……未来がいなくなつたらパパやママは悲しむよ。とても、置いて

いけない」

目を開けた赤ん坊は、大人びた言い方をして慈しむように自分の両親を見上げる。

「そうだね、でも未来ちゃんがパパやママが心配でずっとこちりでうろついて天国に行つてないつて知つたらもつと悲しいかも。早く天国に行つて、また新しい命で戻つて来れたらいいと思うけどな」「そうだね、このパパやママたちでは無くとも、きっと未来が産まれたら喜んでくれるパパやママのところに戻つてくるね」

赤ん坊は、自分の両親をその小さい手を抱くように回して葵を見る。

「行こうか、お姉ちゃん」

赤ん坊の姿は消えて、珊瑚礁の広がる海のような青い玉が浮かんでいた。それを容器に入れながら葵は自分の両親のことを思った。親より早く勝手に死のうとしてたなんて、お父さん、お母さん本当にごめん。

魂の回収を確認すると、病室の窓の外で成り行きをうかがつていた「ちょっと白」は一声力ア、と鳴くと飛び立つていった。

それにしても「ちょっと白」って本当に貫太郎はネーミングセンスないよと思いながら、病室を出て、葵はそつと戸を閉める。惜しまれる死。穏やかな死。どうせなら川崎さんのように自分も死んでいきたい。それまではがむしゃらに生きていきたい。

そんな事を考えながら歩いていると、待合に置いてある大きなテレビからニュースが流れていた。

「只今、凶悪な事件が起こったもようです。K市松原町の住宅地に少年を人質に取つた男が立てこもつていています。現場にカメラを回します、報道の池田さん」

キヤスターの上ずつた声の後に映し出された映像を見て、葵はここから事件の現場が近い事を知り、思わず走り出した。それを例の妊婦が見るが。

「パパ、あの子よ。わざと言つた娘」

「え？ どこに？」

「もー、いつちやつたわよ」

怒られた彼女の夫は、生返事を返してテレビを食い入るように見ていた。 その家の窓に一羽の鴉が飛び込んでいく。

現場に駆けつけた葵は、警察やテレビ局の車を縫つて、その家の敷地に入つて行く。 お勝手口の辺で中をうかがう警官の横を通り過ぎ、窓を開けて入り込む。 葵が入つたのは、風呂と洗面所など水周りの場所だった。 そこから廊下がリビングまで延びていて、怒鳴り声はそのリビングから聞こえてくるらしい。

そうつと歩きながら、葵はリビングにぴたりついたようにある和室に隠れてリビング側の襖を少し開けた。 そのまま行つてもいいのだが、もし犯人に靈感があつたら話がややこしくなる。

男は三十代始めくらいで、病的に痩せた体をリビングの窓の横に貼り付けて外の様子をうかがっていた。 その男の体の前には、包丁を突きつけられた小学生くらいの男の子が泣きじやくりながら捕まっている。

「た、助けなきゃ」

腰に括りつけたナイフを取り出して葵が飛び出そうとしたが、後ろからがつちりと腕を回されて止められる。

「ばか、止める。同じ事を二度も言わせるな」

その声に葵は、びっくりして後ろを振り向いた。

「もしかして招魂するのはあの男の子の魂なの？」

13・ターゲット（高橋未来）（後書き）

## 14・飲み込まれる

「おまえ、待ち合わせの場所に行け。これはおれの仕事だ、邪魔するな」

そんな……葵は貫太郎の言葉に愕然とする。これを放つておくのか。殺されるのを待つていつの？ そんな事できない、そんな事できないよ。

「貫太郎には悪いけど、助けられるかもしれないのに、出来る能力を与えたのに使わないなんてわたしには無理」

「わかったよ」

大きなため息をついた貫太郎は、葵を離して立ち上がった。

「わかったから、おまえは手え出すな。これはおれの仕事なんだからな」

「うん」

うなずく葵にどいてると小さく言つて、貫太郎は襖を大きく開け放つ。誰もいないはずの和室の襖が大きく開いて男は驚いて大声を出す。

「だ、誰だ！ 出て来い、このがきをぶつ殺すぞ」

その男に向けて、テーブルの下にあつた椅子が飛んで男の頬を掠めた。

「な、何だ？」

その椅子の行方を追つていた男の頭にフライパンがもの凄い勢いであたり、あまりの痛さに男は、少年を突き飛ばしてその場にうずくまつた。

「お兄ちゃん、助けてくれるの？」

少年が目をまるくして目の前の空間に向かつて話しかける。

「こっちにおいで、ここから逃げるんだ」

ガラツとキッチンの窓が開いて、震える足を引きずりながら少年は窓枠に手をかける。

「いらっしゃり、逃げようとしてもダメだ。とまれっ」

頭から血を流しながら、男が窓に乗り上げていた少年の足を掴んだ。そこにソファー・カバーが飛んで来て男を包みこむ。ぱたぱたと暴れる男は脚を縛もつれさせて床に転がつた。やつと抜け出した男が怒りに振るえながら包丁を握りなおして窓に突進しようとした刹那、台所からキッチンばさみが飛んで来て男の腹に刺さつた。

「今のうちに早く出ろ!..」

その声に弾かれたように少年は窓から飛び出して行く。その後に、もの凄い音とともに入つて来た警官たちは包丁を持っている男が、腹にはさみを突き刺されて呻きながら床に転がつているのを見つけた。

「怪我をしているぞ、早く待機している救急隊員を呼んでくれ」

刑事の言葉に一人の警官が飛び出す。その間にも男の胸元が青くなつていいく。男が何かを呟いた。

「何だ?」

「わかった、つて言つたんだよ。俺をくれてやるつて言つたんだ、糞野郎!..」

大声で警官に答えた男は、糸にでも釣られているように立ち上がるとその警官の腕に噛み付いた。

「うわああ、何をするんだ、離せ!..」

思つてもみない男の行動に慌てながらも、警官は男の顎を反対の手で掴んだ。他の警官も寄つてたかつて男を抑えにかかる。これで一瞬で終わるはずが、次の瞬間には全て逆の展開で終わつていた。

男に飛ばされた警官たちがリビングの壁にぶつかつて倒れ、初めに腕を噛まれた警官は肩口から血を流してその場に崩れた。その中心に立つてているのは先程の男なのに、その姿は大きく違つてている。

髪が逆立つて目が飛び出したように大きく前にでている。口は耳まで裂けていて、ずい、ずいと制服をまとっているままの腕を飲

み込んでいく。肩が異常に張つて猫背になり、爪が十センチはあるうかと思うほど伸びている。僅かに蟹股に足を開いた男は、腕を全部飲み込むと獣のよつた咆哮を上げた。

「しまつた！ 嘰われたか」

貫太郎がデニムにはさんでいたピストルを抜いて男だつた物、に向けて素早く照準を合わせる。

ズイーンという音がして怪物の真ん中に当たつたと思ったが、怪物は素早くジャンプすると貫太郎の背後に回れる。

「ちつ、外したか」

貫太郎は後ろを振り向きざま、スライディングの要領で、怪物の上半身に比べて華奢な足をすくつ。大きな声とともにひっくり返る怪物が、鋭い爪を貫太郎の肩めがけて突き刺す。

「痛つてえ！ よくもやりやがつたな、ギヨロロ野郎」

貫太郎は、右手に持つたピストルの台座を自分を刺している爪に向けて叩きつける。爪が根元から折れて血が噴出す。怪物は怒りのために口から泡を吹きながら、そのまま貫太郎を抑えにかかる。そこへ葵が堪らず飛び出してきて、ナイフを怪物の背中に突き立てた。

起き上がつた怪物の大声が響く。大きく身をよじつた怪物の動きについていけず、葵はナイフを離し、横に振り飛ばされた。

「葵、そのままそこから動くんじやないぞ！」

うなずく葵を目の端に捕らえた貫太郎は、怪物が姿勢を低くして向かつて来て、体を掴もうとした刹那、怪物の両腕に足をかけて飛び上がる。一瞬の間に相手の頭を掴むように両手で持つと、そのまま勢いをつけて飛び越した。着地する時には背中に刺さつたままのナイフを股の下まで引き降ろしていた。

どさどさと内臓が落ちる音と液体の流れる音。金氣を含んだ甘いような生臭い匂いが辺りを包む。その時を待つていたかのように怪物の体が倒れた。

そしてその血溜まりに転がる小さな玉。貫太郎はその玉を拾い

上げて容器に入れる。

「終わったの？」

貫太郎がナイフを一振りして血を飛ばすと葵に渡す。

「うん、終わった。殆ど喰われかけてたけど何とか間に合つたみたいだな」

葵が改めて見ると、怪物の遺体はただの人間に戻っていた。そこには腹にハサミを刺された、覚せい剤中毒の男が倒れているだけ。おびただしい血も撒き散らされた内臓も残つてはいない。慌ただしく動く、鑑識の人間を避けながら一人は家を出る。庭で保護された少年が、母親に抱かれながら刑事に話をしている。「お父さんが急に入つて来て、僕を殺すつて。お母さんが新しく結婚するのが嫌だつたんだつて。大声で怒鳴られて……怖かつた」「ごめんね、翔に辛い目を何度もみさせて」

母親が子どものように泣きじやくりながら、自分の子どもの頭をさすつている。どうやら、別れた夫が元妻が再婚するのを止めさせようと家に乗り込んで来たが、家にいたのは子どもだけだった。そのため薬のせいでやや錯乱状態にあつた男が逆上して、自分の子どもを手にかけようとしたらしい。子どもが隙を見て、母親の携帯にメールを送つたため、母親が警察に連絡した、といふいきさつだつた。

「代わりに親が死んだから、この件は終わりだ」

貫太郎はそう言いながら、自分の肩から爪を引き抜く。

「あの、お兄ちゃんが助けてくれたんだよ」

子どもが指差す方へ目を向けた母親と刑事の目には、庭木以外何も目に映らなかつた。

「あと、一件で葵は終わりだ。続いて行くぜ」

やれやれと言いながら歩き出す、貫太郎の疲れ切つた背中を見て葵は何だか切なくなる。

「貫太郎の招魂つていつもあんなに大変なの?」

葵のかけた言葉に、貫太郎は苦笑いしながら振り返った。

「さつきのは、葵が大変にしたんじゃなかつたつけ？ まあ、正職員だからな。あんなもんでしょう」

違う、と葵は思う。 クラスⅤだからじゃないの？ そう、問いかけたいがその問は口の外へは出ていかない。 だが、貫太郎にはわかつたのか、葵から目をそらして小さく言つ。

「そうだ、おれは自然死や安らかな死とは無縁だ。重罪人だからな」

「貫太郎、本当なの？」

「うん、本当だ。おれは一百人以上を殺したんだ」

「……」

貫太郎の言つたことに、葵の頭の中はパニックになる。 二百人つて一体……？

「話してやつてもいいけど、仕事を済ましてからにしようぜ。辛氣くさくなるつてか、おれたちの存在自体すでに辛氣くさいんだけど」 またもやはぐらかされたが、こんな話は本人がその気にならないと仕方がない。 ねだつて聞くものじゃないのも確かだ。 気にはなるが今は、葵の知つている貫太郎を信じようと思つ。 さつきだつて葵の頼みを聞いてくれた。 優しいはずだ。

だつてわたし、貫太郎の事……。

「ストップ！ その先を考えるなよ、口にも出すな。 おれ、そういうの苦手なんだ、もう恥ずかしいんだ、頼む」

「何が頼むよ、もうわたしの心の中覗かないでよ。 ばか！ 変態！ 死神！」

葵は、またもや貫太郎に自分の気持ちを知られたことに慌てて反撃に出た。 結構半端じやない力で背中を拳で叩かれながら貫太郎は目を伏せる。

しかし葵には、背中を向けている貫太郎の顔は見えなかつた。

「なあ、急ぐし、飛んで行かない？」

「絶対嫌だ」

葵の答えに、くそつと言いながら貫太郎は前をすんずんと歩く。その後を葵は小走りに走りながら、何となく気分が沈むのを止められない。

後、一つ招魂すれば葵は無事、生き返ることが出来るのだ。それは本当にうれしい。でもそつしたら貫太郎を見ることは出来なくなるんだろう。話をする事もできない。それを考えると胸が痛い。もつと普通に、何となく一人で河川敷でも歩きながら、しょうもない話をしたい。

それは やつぱり無理なんだろ。貫太郎はもう死んでいるんだから。

「ここだ、行つてこいよ。見ててやるからだ」

貫太郎は、輸入住宅が並ぶ新興住宅地の一角を指差して葵に魂を入れる容器を差し出す。

「異 百合子さん、四十一歳だ」

「わかつた、行つてくる」

最後の仕事だ。拳をぐつと握ると、葵は思いを頭の隅に追いやつて急いで瀟洒な家の前に立つ。外国風の家に見合つよう庭はイングリッシュガーデンの装い。それはまるで雑誌にでも出てくるような代物だった。庭に立ててあるラティスの陰に隠れながら、葵は家の中をうかがう。

庭に面したリビングは、ベージュを主体とした色味で統一されていて上品にまとめられている。塵一つ落ちていない部屋の中のクッションが効いたソファーに座っている中年の女性。家と同化してしまいそうに上品で 平坦な印象を与える。

「これで、これから的人生、わたしのことを忘れられなくしてやるわ。離婚なんでしたらあの人は、あつさりわたしのことなんて忘れて、あの下品な女と楽しく暮らすだけなんだから」

目の前の睡眠薬に向かつて、百合子は吐き出すように言った。文句を言つてやろうにも夫はもう何ヶ月も家に帰つてこず、携帯電話にも出ない。会社に電話しても居留守を使われていた。だが、給料はそのまま手付かずで口座に入つてくるのだ。

「わたしをばかにしてつ」

大声でそう言つと百合子は薬の瓶を掴んで蓋を開ける。

たくさんある薬を何回にも分けてすべて飲み干す。薬の瓶は空き瓶を溜めている袋に、コップはざつと洗つて造り付けの食器洗い乾燥機の中に入れる。こんな時でもきつちりとしないと気がすまない自分に僅かに苦笑いして、百合子はくたりとソファーに倒れ込

んだ。

葵の見ている前で、一時間も経つてから彼女の胸がオレンジ色から暗い色に変わってきた。

・何で濁つた色なんだね?。 どうして?

「あなた、誰?」

いきなり目の前に立つて険しい顔で問い合わせる葵。百合子に、葵は慌ててラティスの陰から飛び出した。

「わたしはあなたを迎えて来たんです、異 百合子さんですよね」

「迎えにきたですって? わたしはどこにも行かないわよ。ここにずっと居てうちの人とあの女を見てなきゃあ」

きつぱりと言つ百合子に葵は一の句が継げない。 いつこう場合はどうすればいいの?

「だつて百合子さん、もう死んじやつてるんですから。ここに留まつたつていい事なんかないですよ。生まれ変わつてまた戻つて来たらしいじゃないですか」

「行かないと言つたら行かないのよ。第一、あなたなんかに名前を呼ばれる覚えなんてないんですからね」

ヒステリックに言い募る百合子にどう、対処したものかと葵はため息をつく。ここに留まって何になるのだと葵は思うが。深い嫉妬に凝り固まつた百合子に、今何を言つても聞く耳を持たないだろう。自分の妄執に捕らわれている魂は、こんなにも濁つた色なんだと葵は悲しくなる。自分もそうだったのだ。自分がかわいそうで他人が皆悪者だった。孤独な自分がかわいそうで不憫で。その反動は自分以外を憎むことに向かつ。

「百合子さん」

おもわず葵は百合子を抱きしめていた。昔の自分を見ているようで、ただ、悲しかつた。誰だつて初めからこんなじやなかつたはずだ。 小さいボタンの掛け違いなんだ。 それは自分からでもあり、他からかもしけない。 それが重なり、積み上げられていつて、気付いた時にはその重みに潰されそうになつていて。

「やめてよ、離しなさい」

「暴れる百合子にそれでも強く抱きしめて葵は何度もわかるよ、と  
呟いた。

「あなたなんかに何がわかるのよ……何が  
「わたしも自殺したんだよ、百合子さん。死ぬかどうかはまだわから  
ないけど。」

「え？」

葵の腕の中の百合子は、暴れるのを止めて葵の顔を見る。  
「だからさ、苦しい気持ち、ひとりぼっちの気持ち、見捨てられた  
ような気持ち、全部わかるよ」

「わ、わたし……」

がつくりと座り込む百合子に合わせて葵も腰を降ろす。

「そんな気持ちのまま、この先ずっとここにいるなんて損だよ」

「損？」

不思議そうに見る百合子に、葵は笑顔を作つてみせる。

「やべ、百合子さんはこれからやりなおせるんだよ。それも初めからね。今度はこんなことにならなによつにしなきゃ。もつとすてきな人生をおくらなきゃあ」

「やり直す？」

百合子は座つたまま長いことまつたく身じろぎ一つしなかつた。  
そしてぽつりともらす。

「そうね、やり直せるんだつたら 行くわ

葵の方を向いた百合子は、何かつき物が落ちたように妙にせばせばと言つて立ち上がる。そして、あつさりと姿を消して青い玉になつて床に転がつた。

「もう、最後まで自分勝手なんだから」

そつは言いながら葵はにこりと笑つて、玉を容器に入れて留め金をかけた。それをデニムのポケットにねじ込みながら後ろを振り返ると、貫太郎が手を振つていた。

これで終わり、終わりなんだ。

葵が戻つて来るのを笑顔で迎えて、貫太郎は魂を葵から受け取ると歩き出した。

「さつきはどうなるかとひやひやしたよ。あのおばさんがもう少し粘つてたら魔物たちに呑まれてたろうな。まあ、よくやつたよ」

「じゃあ、わたしは結構危ない橋を渡つていたのかと今更ながら怖くなつて、貫太郎を見る。貫太郎はそのまま川沿いに向かつて歩いて行く。遅れないようについて行きながら葵は貫太郎の背中に声がかけられていた。

「おれの事、話すつて言つてたよな」

「う、うん」

河川敷に置いてあるベンチに座ると、貫太郎が川面に視線を移す。初夏の日差しを受けて川面はきらきらと輝いていた。

「おれが生きていた時代はちょうど明治時代に入る手前の混乱した時代だつた。おれは親を亡くして、たつた一人の姉と村長の家に引き取られて下働きをしながら暮らしていた。おれの本当の名は佐吉つてんだ」

その前の年は、日照りが続き作物は実る前にほとんど枯れてしまつていた。次の年は変わつて雨が続き、はじめは皆喜んでいたが梅雨どきを一ヶ月も過ぎても雨は降り止まなかつた。年の初めに撒いた種はすべて流れるか腐り、一昨年から蓄えていた雑穀を細々と分け合つていた村人の中からも倒れるものが出できた。

「これはやつぱり神様におすがりするしかないな」

村のまとめ役が集まつてそう決まると、村にある神社の神官が放つた矢が指した家の娘を人柱にすることで話がまとまる。

その三日後、決まつたのは佐吉の姉の小夜だつた。

「これは神様のお決めになつたことだ。かわいそうな事になつたが堪えてくれ」

村長が深く頭を下げるのに一人は何も言えない。

「祭祀は明日取り行うことになつた。せめて今晚は母屋に来て、我らのために尊い命を捧げる方のお世話をさせてくれ」

佐吉は一人でそれまでを水入らずで過ごしたかつた。 というより納得はしていなかつた。

神様つて本当にいるのか？ 一人から両親を奪つたくせに。神はまた、佐吉から大事な姉を奪うつもりなのか。

黙り込む佐吉を横目に見ながら、一つ違ひの姉の小夜が村長に同じくお辞儀をして答える。

「今まで村の人たちには良くしてもらいました。わかりました。今から母屋の方へ伺います。弟をよろしくお願ひします」

「姉ちゃん」

「佐吉、ここで村の皆さんに恩返しができるなら姉ちゃんは本望だ。だけどあんたのことだけが心配でならない。おまえが元氣でないと、おつ母やおつ父にあら、顔向けできねえもの」

一つしか違わないのに両親が死んでしまつてから、いきなり弟の

面倒を見なければならなくなつた小夜は、十六という歳より随分と大人びていた。

「佐吉の事は、ちゃんとじつちで面倒をみるで。安心していいからな」

村長に手を引かれて、攫われるように、小夜は牛小屋の一角にある佐吉と小夜の住まいから連れて行かれた。

夜半過ぎ、佐吉はどうしても小夜に会いたくなつて母屋にもぐり込む。床下を這つて進むと話しが聞こえて、佐吉はゆっくりと声のする座敷の下へ向かつ。

「何や」「ねたらどうしようとかと思つとつたが、すんなり受け入れたようでほつとしたわい」

村のまとめ役の一人がやれやれといった声を出した。

「そんな事言わすかいな。今まで世話したつたのは、こんなときには役だつてもううために決まつとる」

村長の言葉に佐吉は唇を噛んだ。やつぱりそうだ、この世に神も仏もいるもんか。そのまま床下を進んで客間になつていて離れに行くと、一旦床下から出て外から小さく声をかける。

「姉ちゃん、開けて」

その声にばたばたと慌てた足音の後に、そつそと戸を開く音がした。

「佐吉、おまえどうした。こんなとこに入つて来て。見つかつたら怒られるぞ」

「姉ちゃん、逃げよう。やつぱり端っから姉ちゃんを人柱にするつもりだつたんだ。おれらの面倒みたつていうけど、牛と同じ所に追いやつてこき使つてきやがつただけじゃないか。そんな奴らのため姉ちゃんが死ぬことなんかないよ」

腕を掴む佐吉の手を小夜は静かに、だがきつぱりと外した。

「んでもやつぱり姉ちゃんは村長さんの言つ通りにするよ。扱いがどうであれ、ここまで生きてこられたのは、やつぱり村の人のおかげだもの」

「姉ちゃん……」

そこへ足音が聞こえて小夜は急いで、佐吉を押入れの中に隠す。現れたのは神主と村長ら村の重鎮達だった。

「小夜、おまえは神に捧げられるが、その前にその体をあらためさせてもらひつぞ」

村長の口調には、ぎらりとしたものが混ざつていて、小夜は夜着の前を堅く合わせると部屋の隅に後ずさる。押入れの佐吉は、聞こえた下卑た声に小夜と同じく身を堅くした。

「なんや、早くこちらに来んかい」

神主に腕を取られて小夜は男たちの前に倒れ込んだが、悲鳴を上げそうになるのを必死で耐える。ここで声を上げたら佐吉が飛び出していくのが目にみえていた。小夜が後ろを振り向いて小さく言ひ。

「こらえろや、頼むから

男たちに裸に剥かれながら小夜は堅く目を閉じていた。しかし、佐吉が感づかないわけもない。

「離しやがれ！ この下種ども！」

いきなり押入れから佐吉が飛び出してきて、小夜に压し掛かつていた神主を突き飛ばす。

「このがき、どこから入つたんじやあ

あつと言う間に取り押さえられた佐吉は、怒り狂つた大人どもにしたたかに殴られ、蹴られて床に転がされた。

「こいつの母親を贅にした時に、こいつも父親と一緒に殺つてしまつたら良かつたんじや

村のまとめ役の一人が吐き出すように言つた言葉を最後に、佐吉は意識を失つた。

佐吉が気付いた時には、すでに夜が明けていた。

「姉ちゃん！」

早く助けなければと、立ち上がるうとした佐吉は、あばらの方に激しい痛みを感じて呻く。きっと骨が折れているのだ。だけど小夜を助けにいかなくては。あんな奴らのために死ぬなんて絶対だめだ。

痛む体を引きずりながら、佐吉は村に唯一かかっている橋に向かう。まだ、時間はあるはずだ。

姉ちゃん、待つてろ。

叩きつけるような雨の中、橋に向かった佐吉は橋脚に縛りつけられている小夜の姿に愕然とする。佐吉の目の前で姉の姿は、増水した川の水にあつと言う間に飲み込まれていった。

「許せない、ここにいる奴ら、全員許さない」

佐吉は繰り返しつぶやきながら反対の道を歩いて行く。その先是、千害に備えて造られたため池がある小高い山だった。佐吉はそこの堰を切ろうとしていた。

「ざまあみろ！」

その声の後に大量の鉄砲水が下流に流れていく。その濁流の中に自らのまねながら佐吉は、ざまあみると叫び続けていた。去年の日照りの影響で大木が立ち枯れ、保水力が無くなつた山肌。その鉄砲水が呼び水になつて周りの土砂を巻き込んでいく。下の村につくころには大きな土石流になり、いくつもの村が被害を受けて大勢の村人が死んだ。

「それがおれの罪だ。おれのせいで罪の無い人間が二百人ぐらい死んだ。そういうこつた。話はこれで終わり、気がすんだか？」

佐吉こと貫太郎は、そう言って葵の方を向いた。

「貫太郎……ごめん」

「え？」

葵の謝罪に、貫太郎は驚いて首を傾げる。

「何でおまえが謝るんだ？」

「だつて、言いたくなかったんだしょ？ 思い出させちゃつて……ほんと、ごめん」

最後はしゃくりあげるように、葵はごめんを繰り返す。

何て壮絶な過去を持つていたのだろう。わたしなんて比較にならない……。

「やめる、そんな事比較なんてするなよ。死のうと思つた理由なんて人それぞれだし、その時の事情を他人と比べたつて仕方ないよ。おまえが辛かつたのは事実なんだから」

肩を抱かれて葵は、貫太郎の胸にすがりついて泣いた。 贊太郎の辛かつた気持ちを、境遇を思うと酷くやるせなかつた。

「なあ、おれが可哀想だと泣いてくれる気持ちには感謝する。だけどだからっておれが一百人もの人たちを殺したことが、正当化されるわけじゃない。それに葵に打ち明け話をしなくつたって、おれがあのことを忘れることはないんだ」

貫太郎は、しっかりと葵を抱いていたがその目は遠くを 遥か昔を見ていた。

「貫太郎が怒るのは無理ないじゃない。そんな酷い目に会つたらわたくしだつて……」

言いかける葵の口を貫太郎は、右手でそつと押さえる。

「だけど、それで関係ない人を殺していい理由なんかにはならない。もつと言つなら村長だつて、村役だつて、神主だつたとしても。あいつらにも家族がいて、守りたいものがあつたんだ。姉ちゃんにしあつておれを守りたかった。その思いをおれは分かろうとしなかつた、いや何にも分かりたくなかつたんだらう」

血を吐くような貫太郎の言葉に、葵はかける言葉もない。

「おれは姉ちゃんのためとか言つて、実はおれ自身のうつぶんを晴らしたいだけだつた。自分を置いて死んじまつた両親に。汚い村の連中に。自分の運命に逆らうこともしない姉に。そして、強引にでも姉を連れて逃げなかつた自分に だ」

「もう、いいから。貫太郎、いいから」

そう、言いながら泣いているのは葵の方だった。貫太郎の話は、身を切られるように切なくて、葵にはどうしてあげられるのかも見当がつかない。

泣声が収まつてきたのに気づき、貫太郎は自分のTシャツをまくると葵の顔を「じじ」と拭いてやる。そして背中をぽんぽんと優しく叩き続けた。

「何でおれがなぐさめてんのか訳わかんないけど。この後、チュウとかしてみる?」

貫太郎の言葉に、泣き止んではねぼつた目を手の甲で拭つて、葵は勢い良く立ち上がる。

「何よ、人がこんなに同情してたのに！　この変態、ばか、死神！」  
泣き笑いのような顔を見せる葵に、貫太郎はいつもの笑顔をみせる。

「ま、落ち込んでるより、そっちの方がぜんぜんいいよ。って、ぜんぜんってこいつ使い方でいいんだつけ？」

ぱんつと葵の背中を叩くと、貫太郎はベンチから立ち上がって振り向く。

「冥府に戻るづけ」

「……うん」

冥府に帰り、前にも行つた大きな観音開きの扉の前で、葵は前と同じく貴太郎を待つてゐる。今度はわずかな時間で貴太郎はそこから出でくると、葵の顔を見てにまりと笑つた。

「任務完了、招魂した魂も無傷で新鮮つてことで無事終わったよ。これから病院まで送つてやるよ」

「うん……あ、これ返さなきや」

そう言って、葵は認識ペンドントとナイフを差し出す。ナイフを受け取つた貴太郎はしばらく手の中の物を見つめていたが、堅い表情で葵に問い合わせる。

「葵、これを使って過去をやり直すか？」

葵は貴太郎の言つ意味が分からず、黙つて見返す。

「現世の時間軸は過去から続く時空間の重なりによつて出来てゐる。このナイフはそれを切ることができる。葵がやり直したい時に連れていいくことも……できる」

「じゃあ、あの三者懇談の日に戻れる？ それよりもつと前にも？」思わず、その話にのりそうになつて、葵は大きく頭を振つた。違う、あのばかなわたしもすでにもう自分の内にある。あるからこそ、今があるのだ。やつたことの責任も含めて、わたしはこれから生きていいく。

「ありがとう、貴太郎。でもそのナイフは使わなくていいよ。この今まで、このわたしで生きていいくよ」

「葵、おれはやつぱり人を見る目があるな。ただのお人よしじゃなかつたぜ。これで最終試験も終わりだ」

貴太郎は、葵の返事に満足そうにうなずく。

そして、『そごそと鞄をさぐると一枚の紙を取り出し、ビリビリと破ると葵の頭から花吹雪のように放つた。それは葵の体に付くと、ボタン雪のように消えていく。葵が苦しんだ冬も一緒に粉々に

消えていくかのように。

「わたしは試されていたの?」

「まあ、葵が承諾していたら契約の延長だったろうな。良かった、良かった」

良かった、を繰り返す貫太郎に葵は複雑な気持ちになつてうつむいてしまう。そんな葵に貫太郎は構わず手を引いて冥府を出て行く。

「貫太郎、もう会えないの?」

「会つてどうするよ、おれ、死んでるんだぜ」

「だけど……これきりでさようならなんて、わたしは寂しいよ」

葵の言葉に貫太郎は顔を背ける。

「おれがこの姿で今度、おまえに会つてことはおまえが死ぬ時つてことなんだ。おまえ、生きたいんだよな。だつたらおれに会いたいとか言うな」

「生きたいけど貫太郎と離れるのも嫌!」

背中に抱きついた葵に、貫太郎はため息をつく。

「この姿はおまえが寿命をまつとうした時までとつておけよ。おまえが大往生した時は必ずおれが招魂してやる。おれは昔に戻つたら、同じことをしない自信がまだない。おれの罪の償いはまだ終わってない。それにまた、葵みたいな奴がいたら、俺はまた人助けしちまうだろうし。お人よしだからな、おれは。それまでは、蒼い目の鴉を見かけたら、それがおれだ。葵ががんばってるかどうか、幸せかどうか、時々見に行つてやるよ。だから、取り戻した命、大切にしろよな」

ぐるりと体を反転した貫太郎が、葵をぎゅっと抱きしめる。

「これで飛んでやるから目、閉じとけよ」

その言葉に葵も貫太郎に両手で抱きついて目を閉じた。一人の体は勢い良く空に舞い上がる。

暴風の中で、葵はこれなら飛ぶのも悪くないと……思った。

田を開けると、白い天井が見えて葵は顔を横に向ける。そこに何日か振りの母親の姿があった。ほんやりと週刊誌に田を通している母親に葵は声をかけた。

「お母さん、付いてくれてたんだ。仕事行かなくていいの？」

母親はしばらく顔をあげなかつた。たっぷり十秒はたつたろう頃、もの凄い勢いでベッドに身を寄せる。

「あ、葵、葵、目を……」

そのまま葵に抱きついて、母親は子どものように泣き出した。ベッドから手を出した葵は自分を抱く体に手を回す。

「お母さん、ただいま。そして」めんね。わたし、生きるよ

葵の言葉に、母親の泣き声は一段と大きくなつた。

「葵、おつ早よ！」

「お早う、なつちゃん」

五月晴れの朝、葵はやつと馴染んできた高校の制服を着て、新しく出来た友達と歩いていた。一年歳下の友達に初めは気後れしていたのだが、自分でも驚くほどそのこだわりは無くなつていて。結局葵は一年遅れで高校生になった。今度は塾の先生や卒業した後も何かと気にかけてくれた中学の先生にも太鼓判を押され、自分も納得して受けた高校に通つていて。忙しくて、相変わらず人間関係にも悩むこともあるが。 それも生きるつてことだ。

その葵の前に黒い影が横切る。くちばしのところが少し白い鴉がフェンスに止まつてカアと鳴いた。

「あ、ちょっと白、だ」

「え？ 何か言った葵？ 嫌だあ、朝から鴉なんて。早く行こ！」

「うん」

そう友達に返しながらも、葵はフェンスに止まつた鶴の横にもつ  
一羽の鶴が止まつたのを見て小さく手を振つた。一羽の鶴は、そ  
れを確認したかのように空に飛び立つていく。

飛び立つた一羽の鶴。 その片方の鶴の目は蒼かつた。

了

## 19・一羽の鳩（後書き）

読んでいただきありがとうございました。  
感想を一言でもいただけたら嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0119d/>

いきるって大変（冥府招魂課臨時職員物語）

2010年10月8日14時56分発行